獅子舞と石橋

折口信夫

青空文庫

能楽の獅子舞には、本式に、赤頭（アカガシラ）に獅子口（シヽグチ）の面（オモテ）をつけて出る。石橋（シヤクケウ）と、望月（モチヅキ）や内外詣（ウチトマウデ）のやうに、仮面の代りに扇をかづき、赤頭をつけるのとがある。現実の獅子として出て来るのが石橋で、獅子芸で世を渡る芸能者の役を勤める場合、扇をつけて出る訣なのである。小沢刑部（コザハギヤウブ）・伊勢の神主などは、望まれて世間の獅子芸能を舞ふのである。

江戸時代の歌舞妓所作事の獅子舞で、石橋うつしでありながら、扇に牡丹をつけ、赤頭で舞つたものゝ多かつたのは、見当違ひである。本行（ホンギヤウ）らしく為立て直した連獅子・鏡獅子の類は、石橋物らしい姿に還つた訣である。だが石橋は法被半切（ハツピハンギリ）など言ふ姿で、首から下は全くの人である。だが、能楽以前は、石橋系統の獅子舞があつたとすれば、恐らく胴体も四つ脚も、やはり獣類の姿を模したものだつたらう。能の獅子へ来る一つ前の形は、延年舞の中にあつたのではなからうか。趣向の石橋に並行してゐるのは、延年小風流の「声明（シヤウミヤウ）師詣清涼山事（ヤウジシヤウリヤウザンニマウヅルコト）」と言ふ曲である。奥州出の僧一人、声明研究の為に都へ上る。又一人の僧、これと道で遇ふ。其志を聞いて、それなら一層本元の唐土の五台山、清涼山へ渡つたがよいと言ふ。奥州の僧、なる程昔寂昭法師――大江定基――も其山へ参詣して、種々不思議を見たと聞いてゐる。案内してくれ、お伴しよう、と言ひ出す。やがて清涼山に達する。こゝは文殊（モンジユ）の浄土だ。法号を唱へ、祈念せよと言ふ。

笙歌遥に聞え候　孤雲の上。是は聖衆（シヤウジユ）の来迎（ライガウ）か。まのあたりなる奇特かな。

とある。寂昭の作と言はれた詩の一部だが、石橋の中入前にも、これに似た文がある。

能なら、後じてと言ふ風で、そこへ文殊菩薩獅子に乗つて、脇士二人を従へて出る。汝等の志にめでゝ現れ、声明の秘曲を授け給ふ、と言ふ。旅の僧、このついでに、極楽の歌舞の曲を見せ給へ、と願ふ。心安いこと。それでは見せてやらうと言つて、囃しになる。霊山を訪ふといふ曲ばかり多い延年舞の事だから、此外にも、寂昭法師が清涼山で不思議を見たことを作つたものがあつた事は、想像して不都合でない。天台山の石橋を見て記録を作つたのは、成尋律師だつたのだが、其を延年を作つた何寺かの僧が、色々な点で錯覚をまじへたものだらう。延年舞には風流（フリウ）の被物（カヅケモノ）をした動物類が活躍するので、右の文殊菩薩を乗せて来た獅子が、大いに狂うた段があつたものと思はれる。

石橋の方でも、間狂言（アヒキヤウゲン）の仙人の這入つて後、して・つれで文殊と獅子とが現れてよいはずだが、何時の間にか、獅子だけがはたらくことになつたのである。

しばらく待たせ給へや。影向（ヤウガウ）の時節も今、いく程よも過ぎじ。

と言ふ語は、前じての語が地にふり替つたのである。謡ひ地よりも、寧、間狂言に牽かれて、獅子の出る形になつてゐる。

石橋の順道な解釈からすれば、獅子が文殊の化身と言ふことになりさうだ。文殊菩薩であつてこそ、獅子の座にこそ直りけれが、適切なので、獅子が獅子の座に直つたのでは、へんてつもない洒落にもならぬ文章になる。併、恐らく今日では、もうさうした変化の痕を辿ることの出来る資料は残つて居ないで、却つて、後じての輝く様な獅子の姿が、目に妥当性を持つて、動すことが出来なくなつた。能自身にも、石橋系統以外の民俗舞踊式の獅子のあつた事を示して

ゐる。歌舞妓の獅子舞も、本流は石橋から出たやうに見えるのも、さう見せたゞけの事である。牡獅子(フシヽ)牝獅子(メジヽ)の番(ツガヒ)――交(ツガヒ)――獅子、其に絡む嫉妬(ヤキモチ)獅子とでもいふべき二人立(ダテ)の獅子、三人立の獅子と言つた形の石橋様式を流しこんだものが多かつた。

上方歌舞妓の立役の獅子舞から岐れて、江戸へ流れこんだ女形の踊りの獅子は、一時期も二時期も画することになつた。瀬川菊之丞の相生獅子――風流相生獅子――は、名でも訣る様に交ひ獅子であつて、両腕で使うた牝牡(メヲ)の手獅子であり、現に江戸下り以前は、番獅子と言つた様だ。菊之丞の第二曲は英獅子(ハナブサジヽ)――通称枕獅子――で、其名をとつたのが、中村富十郎の英執著獅子(ハナブサシフヂヤクジヽ)だつたのである。

元々石橋から出たものではない此系統の獅子が、踊りには多かつた。其外に、太神楽・角兵衛獅子をとりこんだ、鞍馬獅子・角兵衛の一人獅子、勢獅子(キホヒジヽ)のやうな二人だちがあり、「三人石橋」の類は、三人だちである。此等は皆石橋が出来る前から、既にその種は用意せられてゐたのである。

青空文庫情報

底本：「折口信夫全集　21」中央公論社
　　1996（平成8）年11月10日初版発行
底本の親本：「折口信夫全集　第十七巻」中央公論社
　　1967（昭和42）年3月25日発行
初出：「時事新報」
　　1947（昭和22）年1月27日
※初出時の署名は「釈迢空」です。
※底本の題名の下に書かれている「昭和二十二年一月二十七日「時事新報」」はファイル末の「初出」欄に移しました。
入力：門田裕志
校正：フクポー
2018年5月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

獅子舞と石橋

折口信夫

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/